

兵庫津遺跡

— 第35次発掘調査概要 —

2006. 3. 13

神戸市教育委員会

兵庫津遺跡は、ミナト神戸のルーツとして古く奈良時代からたびたび歴史の表舞台に登場してまいりました。

今回、ご報告いたします、兵庫区切戸町での発掘調査におきましては、不明でありました兵庫城の名残りを留めるとされている勤番所の石垣を確認することができました。

港湾都市「兵庫津」の成り立ちを考えるうえで大変貴重な成果であるといえるでしょう。なお調査にあたりまして、ご協力いただきました方々ならびに関係諸機関に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月
神戸市教育委員会

目次

兵庫津の歴史 …………… 1

第35次調査の概要…………… 2

兵庫城周辺の移り変わり …… 7

まとめ …………… 8

例言

1. 本書は神戸市兵庫区切戸町6丁目に所在する兵庫津遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、文化財課 山本雅和・橋詰清孝・内藤俊哉が、また本書の作成・編集については内藤が行った。
3. 本書で使用した方位は座標北で、その座標は、平面直角座標系第V系（世界測地系）に属する。標高は東京湾中等潮位(T.P.)で表示した。
4. 本書で使用した遺構写真は、調査担当者のほか丸山 潔に、遺物写真については西大寺フォト杉本和樹氏によるものである。
5. 本書掲載のfig.5およびfig.22～25の絵図は神戸市立博物館の所蔵資料および寄託資料である。
6. 現地での発掘調査および報告書の作成にあたっては下記の関係機関ならびに諸氏にご協力いただきました。ここに記して深謝いたします。

医療法人 一輝会・神戸市立博物館・池田千冬・北垣聰一郎・高久智広・鷺尾寧一（敬称略）



fig.1 第32次調査地 S=1:5,000
(神戸市発行2,500分の1地形図「兵庫」より作成)

一 兵庫津の歴史 一



fig.2 第32次調査地（港湾施設）

兵庫津遺跡は、神戸市兵庫区南部のJR兵庫駅東側からJR和田岬駅付近にかけての広範囲に所在する兵庫の港と港町を中心とする古代（奈良時代）から近世期（江戸時代）の遺跡である。考古学的には、長らく不明であったが震災以降、復興関連等の調査が増加したこともあり、兵庫津の歴史がしだいに明らかとなってきている。

兵庫津は、古くは「大輪田泊^{おおわだのとり}」と呼ばれ、文献上もたびたび登場する。特に平清盛により経ヶ島が築造され、日宋貿易の拠点とされたことは著名である。平成15年の第32次調査においては、奈良時代に遡る港湾施設と考えられる遺構が確認された。やがて中世後期に入ると寺社勢力の庇護のもと瀬戸内海運の主要港として栄えた。このことは「兵庫北関入船納帳^{ひょうごきたせきいりふねのちよう}」などの文書からも窺うことができる。

室町時代前期には、明との通商の窓口として将軍家の倉庫が設けられるなどの整備が行われた。明船来航にともなう将軍義満の兵庫下向の記事も文献にたびたび登場する。

少し時期は下るものの平成8年に実施された兵庫県教育委員会の調査や、その翌年の市教委の第15次調査においては大規模な倉庫と考えられる石敷建物が確認されている。

その後、一般的には15世紀半ばに始まる「応仁・文明の乱^{おうにん・ぶんめい}」によって港の機能は荒廃し国際港としての地位を堺に明け渡し、とされていたが近年の発掘調査の成果においては、荒廃したとされる15～16世紀の時期に中国製陶磁器がかなりの量出土していることなどから、再検討される必要が指摘されている。

戦国時代には有力大名の興亡の舞台となり、信長による花熊城攻略後には、兵庫城が築城されて町の周囲に堤と堀を廻らせ兵庫津の町は城郭化がおこなわれる。この堤は、都賀堤^{とがのつみ}と呼ばれ江戸時代まで兵庫の町に残されていた。

江戸時代に入って尼崎藩領後に幕府領となるなかでも、大坂と西国との人の往来、物資の流通の要所として発展を続け、人口2万人余を数える国内でも有数の港町として栄え、第15次調査においては、当時の賑やかさを彷彿とさせる町屋群もみついている。やがて幕末には兵庫（神戸）開港をむかえ現在のミナト神戸へと至る。



fig.3 第15次調査地（礎石建物）



fig.4 第15次調査地（近世町屋群）

— 第35次調査の概要 —

①調査地の位置

今回発掘調査を行った地点は、元禄9年（1696）に描かれた『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図（元禄兵庫津絵図）』によると「御屋敷」と記された尼崎藩の陣屋（後の勤番所）が所在した地点にあたる。

兵庫陣屋については、尼崎藩が兵庫津支配のために奉行所を置いたもので、兵庫城の跡を利用したものとされる。

兵庫城は、織田信長による花熊城攻めの後、新たに一帯を治めることになった池田恒興らにより天正8年（1580）築城されたといわれ、普請にあたり花熊城の建築材が転用されたという。

なお兵庫陣屋は、幕府の直轄地となった明和6年（1769）以降、新たな勤番所の建物の建築に伴い周囲の堀を埋め立てて南半分の敷地とともに町屋にされた。明治維新後、勤番所には県庁が置かれその後裁判所などに転用されたが、明治29年（1896年）兵庫運河の掘削により取り壊された。

②発見された遺構

石垣と濠 I区を東西方向に横断する、延長約8m、高さ（深さ）約1.2mの石垣の列が確認された。この石垣の前面（南側）には、濠状の堆積が認められ江戸時代中期（18世紀後半）から後期（19世紀）にかけての遺物が出土している。

この石垣となる切石は、概ね横50～60cm、縦30cm奥行き50cmの切石で横目地を通して4～5段布積みにしたものである。第1段目（最下段）の石列は西半分強前方（南側）にせり出したかたちで検出され、東端の3石では、



fig5. 元禄兵庫津絵図と現在の地形図の照合



fig. 6
濠および
石垣全景



fig7. 断面にみられる埋め立て普請跡（調査区壁面）

入れられているのが観察された。また調査区の西側部分では、掘形を板と杭でおさえた痕跡もみられた。**濠の埋め立て普請跡** また、この濠は最終段階において一部（西側）が埋め立てられている。埋め立ては西から3分の1ほどの所で南北方向の石垣を築きその裏（西側）を埋めるものである。石垣は、落とし積みに近いもので石臼や五輪塔などの石造品も転用されていた。底部には梁材の転用と考えられる建築材が土台木として使用されている。裏込めは 小石や瓦の混じった粘土と砂利を交互に充填している。その後ろ側には、80cmほど浮かせた丸杭を数～30cmの間隔で3列打ち込んで補強している。また埋土は、砂や砂利が多く含まれた土で行われ、さらに上層の10～20cmほどには漆喰状の土を貼るなど入念に造られている。このほか、表面については、石垣の端から2mほどの幅で敷石を施している。

町屋跡 石垣の検出された遺構面において、石垣の裏込めと接するように礎石と考えられる長さ20～40°の平らな石が存在する。また同様の石が調査区中央部にも散見される。おそらく町屋を構成する建物の一部と考えられる。しかし、この遺構面は調査区の北側にいくほど攪乱を受けており建物の規模等は確認できなかった。

陣屋以前の遺構 発見された石垣のさらに北側で、下層の基盤層から石垣より古い段階（17世紀初め頃）の濠状の遺構が検出された。この濠状の遺構は、東西2箇所の建物基礎部分の調査区(Gr.1・2)で確認されており、東西方向に緩やかな断面U字形となるような掘り込みがみられる。深さは約60cmで底には水が溜まっていたような粘土の堆積が認められた。北側の立ち上がりについては、上層の石垣の掘形によって攪乱を受けており不明である。

工事によって影響のする北側の調査区(Gr.5・6)や中央部の調査区(Ⅱ区)では、さらに下層についても調査をおこなった。湧水が激しく地層も軟弱であったため一部では平面的な調査が不可能であったものの土坑や落ち込み状の遺構が確認されており、14世紀から15世紀にかけての土師器皿や中国製の陶磁器などが出土している。



fig.8 堀状遺構

ほとんど石列からはみ出してしまっている。また、残りの東半分については、西側に認められない土台木が据えられた石積となっており、これは大規模に積み代え替えられた痕跡の可能性がある。

石材は花崗岩の割石であり幅4～5cmの^{やあな}矢穴痕が認められるものがある。現地で加工・調整した合端^{つめいし}合わせよるであり、詰石には割りクズが使用されている。

石垣の東部分において築造の状況を確認するために断ち割りトレンチを設定した。この結果、石垣は地杭・土台木などを据えずに積まれており、裏込めは直径20～40cmの礫が



fig9. 土師器出土状況 (第3遺構面)



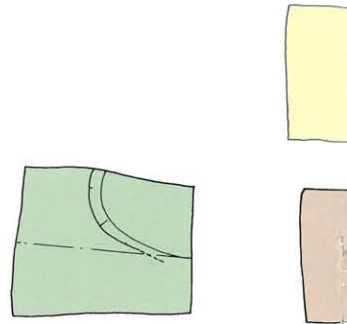
fig10. 石垣裏込め



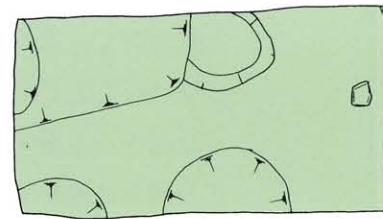
fig11. 土台木

凡例

- 断面調査
- 第3遺構面
- 第2遺構面
- 黄は試堀坑
- 白は第1遺構面(前期)
- 青は " (後期)



Gr.5



II区

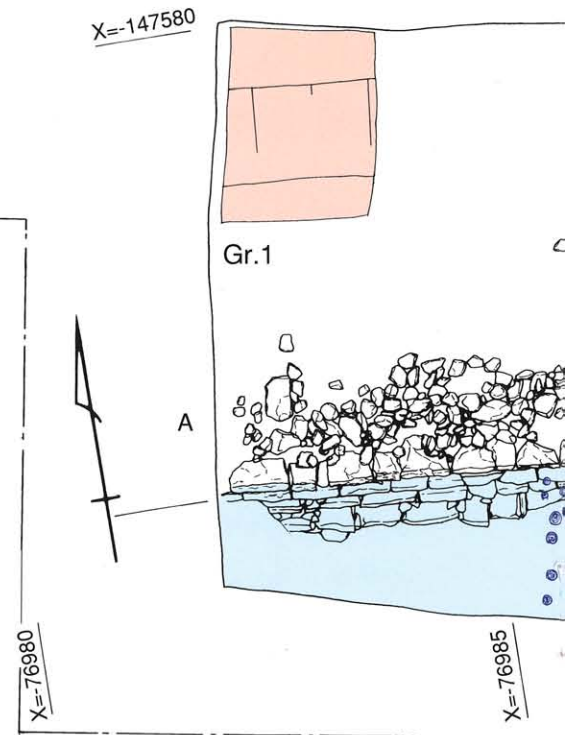
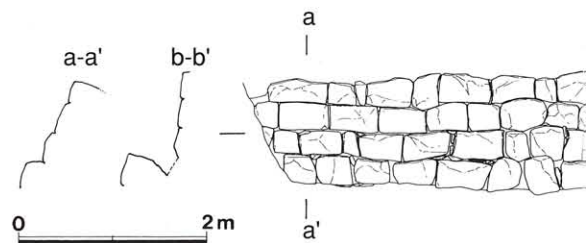


fig12. 調査区平面図



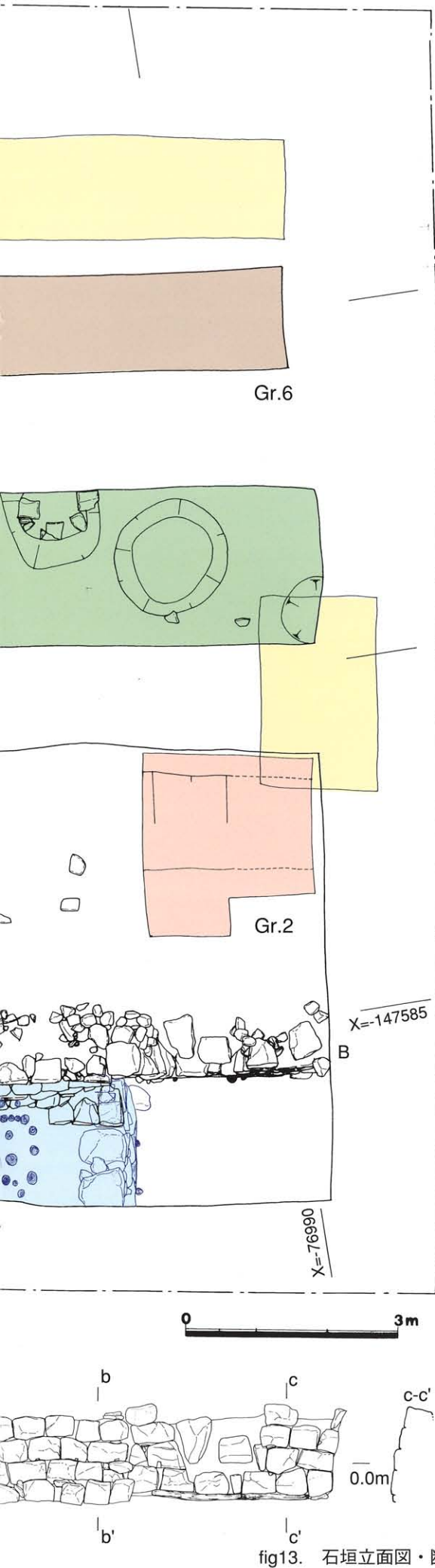


fig13. 石垣立面図・断面図



fig14. 埋め立て時の石垣

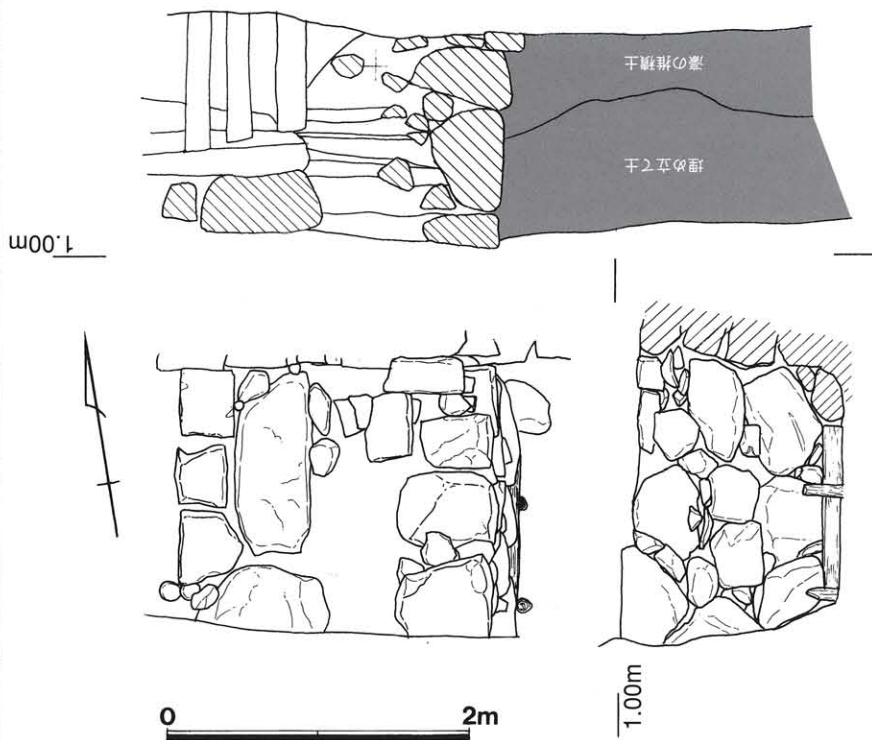


fig15. 埋め立て時の石垣平面図・立面図・断面図



fig16. 埋め立て部分の杭列



fig17. 濠内出土遺物



fig18. 下層出土遺物（第3遺構面）

③出土遺物

今回調査した、濠の中や町屋跡からは、多種多様の遺物が出土している。

なかでも、江戸時代中～後期の遺物が多く当時の生活を窺う上で貴重な資料となっている。とくに瓦類と陶磁器類が多くを占めている。

土器類 江戸時代の陶磁器類のなかでも肥前系の磁器は、椀・皿など種類も多く広く使われている。

他にも備前焼や丹波焼も挿鉢や甕、在地で作られたと思われる素焼や施釉の灯明皿などもある。

また下層（第3遺構面）の遺構からは、14～15世紀の土師器の皿や中国製の青磁や白磁なども出土している。とくに小皿は、使用された後かためて投棄されていたようで、同じ作りのものが集中して出土する。

瓦・土製品 瓦類は、江戸時代後期のものがほとんどで平瓦・丸瓦をはじめ軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦などが出土している。

とくに、濠の埋め立ての際には、埋め土のバラス材として多量に混入されている。

土製品は、漁撈に使われた土錘や玩具である土人形や芥子面などもみつまっている。

石製品 濠の中や町屋跡濠からは砥石などの石製品も出土している。濠の埋め立て時に石垣や敷石の石材として使われていたものとして、五輪塔や一石五輪塔、石臼などもみつまっている。



fig19. 濠の埋め立てに使用された石造品



fig20. 濠中から出土した木製品

木製品 濠の底に溜まった粘土状の埋土は、湧水層下であったために木製品についても腐らずに出土した。箸や漆塗りの椀などの食器類をはじめ下駄や柄杓、樽の栓その他いろいろな部材となるものがある。

鍛冶関連遺物 第1遺構面の町屋跡からは、鉄滓や鞆の羽口といった遺物もみつまっている。

滓はわんがたさい椀形滓といわれる精錬の工程時に発生するもので、多量に出土していることから町屋群のなかに鍛冶工房のようなものがあった可能性が考えられる。



fig21. 鍛冶関連遺物

— 絵図にみる調査地周辺の移り変わり —

兵庫津の町は、比較的多くの絵図が残されており、これらの史料から今回の調査地周辺の様子を振り返ってみたい。

まず、現存する最古の絵図である元禄9年（1696）の『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図（元禄兵庫津絵図）』での様子については「①調査地の位置」で触れた。

さらに江戸時代後期にあたる明和6年（1769）の兵庫津絵図においても同様の場所に濠に囲まれ石垣を廻らせた「御陣屋」の記載がみられる。

その後、幕府による上知が実施された明和6年（1769）以降に作成された絵図である寛政2年（1790）の『兵庫津寺社絵図』においては、濠に囲まれた「陣屋」はすでに無く同位置の北半分は北・東・西3方を2重線で囲われたには「御番所」という記載がみられる。ただこの絵図については、兵庫津内に存在した寺社の配置を示したものであるため、町屋や水路などの記載については少しデフォルメされていると思われる。

さらに時期は下るが明和6年の兵庫津絵図と同様の形式で描かれた安政4年（1857）頃の『兵庫津絵図』では、旧陣屋の部分は濠が埋め立てられ幅の狭まっており石垣もみられず、敷地の中央には広い街路が通りその北半分に「御番所」が、さらに残りの部分には人家が進出している様子が描かれている。また、濠は埋め立てられ狭くなっているものの水路によって河川へとつながっている。

陣屋から新たな勤番所の建設により濠が埋められ、埋立地と南側の敷地が新たに町屋が広がっていく様子や掘割を利用した水路などが何え大変興味深い。



fig22. 兵庫津絵図（1790）【部分】



fig23. 兵庫津寺社絵図（1857）【部分】

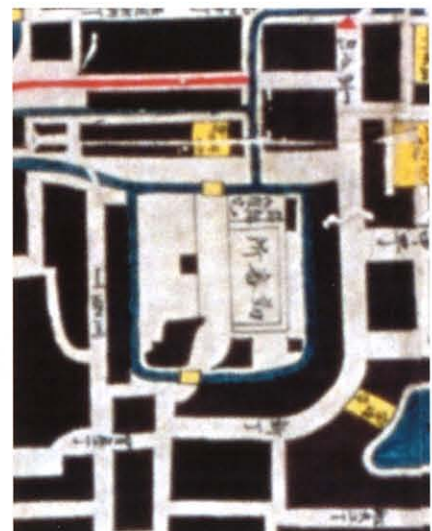


fig24. 兵庫津絵図（1857）【部分】

— まとめ —

今回の調査においては、兵庫陣屋および勤番所の遺構と考えられる周濠および石垣が確認された。発見された濠の一部は18世紀後半に大規模な普請によって埋め立てられた痕跡が認められた。

確認された石垣は、出土遺物の時期や絵図との照合から、上述した陣屋や勤番所の北西側に設けられた濠の外周側にあたると思われる。

この結果によって、これまで元禄期の絵図で推定されていた兵庫陣屋の位置について明確にすることができた。

江戸時代後期とされる兵庫津陣屋絵図 (fig.25) によると、濠の際まで家地割りがなされていた様子がみられる。石垣の裏込めと接するように検出された町屋の礎石もこのことを裏付けるものであろう。

また、石垣の最終段階でみられる大規模な埋め立ての痕跡については、前節において検討した絵図などに認められる陣屋から勤番所に造り替えられた際に行われた濠の埋め立て普請に伴うものと考えられる。

さらに、石垣の北側の下層で確認された石垣以前の濠状の堆積は、出土遺物などから江戸時代初期のものと考えられることから、兵庫城築城当初の遺構の一部である可能性が高い。兵庫城については、江戸時代初期に置かれた「陣屋」がその遺構を利用したものであると考えられているものの、規模・構造については、不明な点が多く残されている。今回の調査においては、この問題についても僅かではあるが、手がかりを得ることができたといえるだろう。

今後、出土遺物等の整理・検討によってさらに兵庫陣屋・勤番所周辺の移り変わりが詳細に解明されていくものと考えられる。



fig27. 石垣の埋め戻し保存

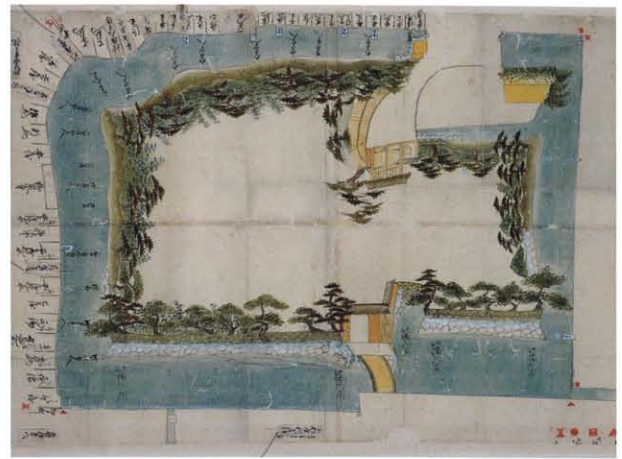


fig25. 兵庫陣屋絵図 (江戸時代後期)



fig26. 兵庫津遺跡速報展 (神戸市埋蔵文化センター)

なお、今回発見された石垣列については、遺跡の重要性を理解された事業者の医療法人 一輝会の御協力によって建築計画を一部変更のうえ現状のまま地中に保存されることになった。このため石垣列については、調査終了後に真砂・土嚢等で周囲を保護し埋め戻しを行った。

文末ではありますが、ここに、地元文化財に対する深いご理解と今回のご英断について記して謝意を表したい。

報告書抄録

ふりがな	ひょうごつせき					
書名	兵庫津遺跡					
副書名	—第35次調査 発掘調査概要—					
編集著者名	内藤 俊哉					
編者機関	神戸市教育委員会					
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号					
発行年	西暦2006年3月31日					
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査原因
		市町村	遺跡番号			
ひょうごつせき 兵庫津遺跡	ヒョウゴケンコウベシ 兵庫県神戸市 ヒョウゴクキレトチョウ 兵庫区切戸町 6丁目	28105	5-24	34度 39分 48秒	135度 10分 32秒	病院増改築工事
調査期間 確認調査 200410～	調査面積(m ²) 30	調査期間 第35次 20041104～ 20041125	調査面積(m ²) 70			
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
兵庫津遺跡	集落跡 城址	室町時代～ 江戸時代	室町時代 土坑 江戸時代 堀・石垣 町屋群	土師器・陶磁器・ 瓦・木製品(下駄・ 曲物)・石製品(五輪塔)		



兵庫津遺跡周辺空中写真

兵庫津遺跡 —第35次発掘調査概要—
2006. 3. 31

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5-1
TEL 078-322-6480

印刷 株式会社 旭成社
TEL 078-222-5800

神戸市広報印刷物登録 平成17年度 第379号 (A-6類)

